

アメリカで生活する児童生徒の コミュニケーション能力向上への取り組み

—— 目的意識をもって学び合う授業実践を通して ——

前ニュージャージー日本人学校 教諭

群馬県前橋市立敷島小学校 教諭 阿部 恵一

キーワード：アメリカ、コミュニケーション能力、学び合い、外国語活動、交流

1. はじめに

人種のるつぼといわれるアメリカで生活する子供たちは、日本国内で生活する以上に、様々な考え方、生き方にふれ生活している。多様な価値観が混在する中、当たり前という言葉はもちろん通用しない。「黙っていてもわかってくれる」ではなく、「黙っていれば伝わらない」のである。お互いに考えを伝え合うことで毎日の生活を成り立たせている中、自己の考えを進んで表現していくことは必要不可欠である。このような中で人格を形成する時期を過ごす子供たちは、時として大きな壁に遭遇する。日本人学校で生活する子供たちにとって、どのような教育活動を行うことが、彼らの生きる力につながるのかを考えて行ってきた実践の概略を紹介していく。

2. アメリカでの学校の様子

(1) アメリカでの現地校（公立学校）

アメリカには、日本の文部科学省のように全国的規模で強力な統制力をもった機関は存在しない。そのため、義務教育は、各州の教育局（Department of Education）に全てを委ねられており、管轄の運営は、各学区（School District）の教育委員会が行っている。ニュージャージー州においても、それぞれ自治町村ごとに教育委員会（Board of Education）があり、独自に運営を行っている。

公立の小・中・高校はパブリックスクール（Public School）と呼ばれ、選択科目によっては教材費を取るところもあるが、授業料は無料で通うことができる。学校には、教育課程についてアドバイスを与えたり、チェックをしたりするカリキュラムのスーパーバイザーは置かれるが、教科書は担任が決める等、指導者一人一人の裁量に任される部分も多い。多くの州で年に一度、州統一テストが実施され、子供たちの成績は学校のスコアとして、学校・学区・郡ごとに集計され、結果はネット上などで広く一般に公開される。教育関係者も必死である。

一方、2002年1月にブッシュ大統領が署名した「どの子も置き去りにしない法」（No Child Left Behind）があるアメリカでは、LD（Learning Disabilities）等の通級指導や外国人移民に対する第2言語としての英語（English as a Second Language：ESL）等、個に応じた手厚い指導体制が整っている。

(2) アメリカでの日本人学校・補習授業校

アメリカにある日本人学校は、ニューヨーク日本人学校・シカゴ日本人学校・グアム日本人学校、そして、ニュージャージー日本人学校の4校である。私立在外教育施設も2校あるが、その数は絶対的に少ない。

一方、補習授業校は北米地区だけで87校も存在する。アメリカに住む学齢期の日本人子弟の多くは現地校に通い、現地校に通う児童生徒の多くが土曜日もしくは日曜日のみの補習授業校に通っている。

(3) ニュージャージー日本人学校

全日制の日本人学校に通う子供たちは、ここ数年減少を続けており、ニュージャージー日本人学校では赴任期間において、2012年度が全校児童生徒72名、2014年度は52名であった。児童生徒が本校に通学している理由は様々で「保護者の赴任期間が短期で、学習言語をマスターするには大変だから」「日本の教育をしっかりと身に付けさせたいから」「高校受験に備えて」「現地校と補習授業校との両方の学習を同時にこなすのが大変だから」「子供本人が日本人学校に行きたいと言うから」などがあり、日本の学校から直接編入学する児童生徒が多く在

籍する。中には、現地校に通った経験のある児童生徒もおり、その中には、現地校にうまく適応できずに、本校に編入学する児童生徒もいる。児童生徒の多くは、日本で生活した経験を持ち日本と同等の国語力をもつが、海外での転居を繰り返したり、国際結婚家庭であったり、米国に永住したりしている児童生徒もおり、個々の日本語力、英語力をはじめ、生活経験には大きな個人差がある。

3. 学習指導上の課題

日本人学校や補習授業校に通う子供たちの学習指導上の課題はいくつもあるが、赴任した当初に実感した課題点は以下の点である。

- 一人一人の日本語力・英語力、生活経験に大きな差がある。
- 少人数なので教師の手が入りやすく失敗経験が少ない。
- 自主的に行動する場面が少ない。
- 少人数の学級では、友達同士の学び合いが少ない。
- 補習授業校では、限られた時間で日本語の学習を行うわけであるので、教師から教え込む授業が主となり、児童生徒同士で学び合う時間は少なくなりがちである。

このようなことから、子供たち自身が目的意識を持ち、互いに考えたことを表現し合いながら学び合えることを意識した授業実践を校内外で積極的に行うことで、児童生徒のコミュニケーション能力を向上させ、生きる力につなげたいと考え、実践を行った。

4. 一人ひとりが考えを表現し合い、互いに考えを深め合う授業実践

(1) 校内での実践

①第6学年 理科「電気の利用とはたらき」2013/1/22

手回し発電機を使い、豆電球・LED・コンデンサ・電子オルゴールをつなげて発電機を回したときの変化を観察することを通して、電気の性質やはたらきについて推論し話し合う学習を行った。話し合い活動を活性化させるため、ジグソー学習を取り入れた。自分が考えた仮説が意外にも崩れていくことに悔しさと疑問を感じながらも、どうしてそう考えたのか根拠を明確にして説明しあう姿が多く見られた。この活動を通して、考えを深め合っていく面白さを感じさせることができた。



自分の考えたことの根拠を説明する児童

(2) 補習授業校での実践

①第7学年 数学「平面図形 円とおうぎ形」2012/12/01 @NJ (New Jersey) 補習授業校

おうぎ形の弧の長さや面積は、その中心角の大きさで決まってくることから、同じ半径の円の周や面積の何倍になるかを調べ、おうぎ形の弧の長さや面積の求め方を理解することを目標に、おうぎ形の求積の場面で、自分の考え方を互いに伝え合う言語活動を行った。「おうぎ形で半径の長さとは何がわかれば面積を求められるか」という発問に多くの生徒が「中心角の大きさ」と答える中、ある生徒が「弧の長さでもわかる」ことに気付き、真剣に気付いたことを説明する姿が見られた。説明を聞き感心する生徒、説明したことが伝わったことを喜ぶ生徒、どちらも、学ぶ楽しさを実感していたようである。

②第4学年 国語「説明のしかたについて考えよう」2014/11/02 @プリンストン日本語学校

写真と文章の対応関係に注意して読み取り、「アップ」と「ルーズ」の長所と短所や、段落相互の関係をつかむことを目標に、考えたことをペアで交流する言語活動を行った。事実を書いている文が、写真のどの部分

を説明しているのか考えたことを友達に説明したり、友達と同じ考えで安心したりする姿が多く見られた。

補習授業校での実践は、補習授業校の先生方への示範授業として「教師ができる限り話さない」「子どもが考える時間を十分確保する」という授業の形を提案することができた。

5. ESLで身に付けた英語をより実践的に使う授業実践

(1) 外国語活動での実践

①第6学年 外国語活動「日本の食べ物を紹介しよう」2013/7/3

普段は習熟度別でESLを行っている児童の実態は、渡米数ヶ月で英語に苦手意識をもつ児童から、英検2級を取得する児童までおり、非常に差が大きい。そこで、米人講師に「日本の食べ物を知ってもらおう」と題し、日本文化について、自分の伝えたいことを知っている英語で表現し伝える楽しさを味わうことで、英語についての関心を高めることを目標に実践を行った。活動内容は、日本の食べ物の写真をカードにしてカルタ風のゲームを行い米人講師にカードを取ってもらうこととし、児童はとって欲しいカードについて説明するということにした。児童は3人グループをつくり、グループで説明したいカードを決め、その写真の説明を色や形で表現したり、食べ物の味や食感を表現したりすることで、米人講師に思いを伝えようと意欲的に活動することができた。

この活動は、自分たちが伝えなかったカードを相手が取ってくれたときのうれしさがああり、英語に苦手意識があった児童も友達に言い方を教わりながら、自信をもち、はっきりと英語を話す姿が見られた。グループで説明を考えヒントを一人一つずつ出すことで、どの児童においても達成感につながった。普段は米人講師が進めている外国語活動の授業であるが、担任が英語で授業を進めることで、英語に苦手意識をもつ児童にとって「正しく完璧に話さなくても伝えられる」ということが伝わり、活動に対するハードルを下げられたかと考察する。

②第4学年 外国語活動「日本の食べ物を紹介しよう」2014/5/2

日本国内では、まだ中学年での外国語活動は全面的には行われていないが、本校では2014年度より初等部全学年で外国語活動をESLの時間と分離して取り入れた。第4学年では、渡米1ヶ月の児童や国際結婚家庭で生まれた頃から英語環境で育つ児童がいたが、児童同士で質問し教えあう活動も取り入れながら、上記①の「日本の食べ物を紹介しよう」と同じような活動を行った。学年4名という少人数であることもあり、互いに相談しながら、米人講師にカードを取ってもらうことができた。日本に住んだことのない児童は、実際に食べたことのない食べ物もあり、食べ物の名前だけでなく、実際にどんな物なのかを説明する活動で盛り上がった。日本の食べ物の写真を準備したことは、伝えたいイメージが共通のものとなり活動の一助となった。

(2) 総合的な学習の時間での実践

①学校間交流 Manito school 2013/11/15 他5回

学校間交流は、毎年近隣のパブリックスクールManito校と年2回（招待・訪問）を実施しているが、それぞれ、子どもたちの活動意欲とコミュニケーションが活発になるよう例年通りにならないことに留意している。

具体的には、初等部児童を縦割りりで4つに班分けし、Manito校の3年生と交流活動を行う。招待するときには、Opening Ceremonyで、挨拶、歌の交流、パートナーミーティングを行い、その後各教室に用意された活動をパートナーとともに体験するという動きである。各教室での活動は、互いにかかわりやすい活動を準備して行った。行った活動は、昔遊び（けんだま・コマ回し・福笑い・だるまおとし・カルタ取り）、紙飛行機づくり&とばし、手遊び歌（アルプス1万尺）、イス取りゲーム、じゃんけん列車、じゃんけんピラミッド、フローティングペーパー等である。始めは緊張していた表情が、活動を行うにつれどんどん笑顔に変わっていく様子が印象的である。

訪問するときには、授業に参加させてもらったり、アメリカのゲームやダンスをおこなったりした。こちらも

また、アメリカ文化を体感するのに有意義な活動となった。

Manito 校とは、年を追うごとに交流も深まっていき、招待状、感謝状のやりとりが始まったり、訪問時に以前招待したときにプレゼントしたペンダントをしっかりとつけてくれたり、心が温まる交流となってきている。

②学校間交流 Gerrard Berman Day School 2015/2/5、2015/3/10

①での活動経験をもとに、2014年度は初等部3・4年生が近隣にあるジューイッシュスクールGerrard Berman Day校とも交流を行った。Gerrard Berman Day校とは2013年度に一度訪問を行ってはいしたが、担当者も代わり交流の打合せも1からのスタートとなった。交流日時だけでなく、内容を決定するまでに何度もメールのやりとりや打合せを行った上での実施となった。



どのカードか真剣に説明する児童

訪問時には、Opening Ceremonyで、挨拶、歌の交流、パートナーミーティングを行い、その後、短縄の跳び方を教えたり、長縄を一緒に跳んだりする縄跳び交流を実施した。その後は、現地の学校には欠かせないスナックタイムで現地のお菓子をいただいた後、ジューイッシュの經典についてのお話を聞いた。最後は、桃太郎のお話を音読で紹介とするという活動を行うことができた。

招待時には、体ほぐしのゲームや子供たちが作った日本紹介かるたを行うことができた。この活動の様子は、現地日系人向けのフリーペーパーだけでなく、タウンの地域新聞にも大きく取り上げられ紹介された。

子供たちは、交流を重ねるごとに話した英語が伝わる喜びを味わうとともに、自分の英語力の高まりを実感し、コミュニケーションの楽しさを味わうことができた。この活動は、ESL等、日頃の英語に関する学習意欲を高め、より高いコミュニケーション能力を身につけるうえで大変有効な活動であった。

6. おわりに

中央教育審議会での学習指導要領改訂に向けた検討が始まった。平成26年11月「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」には、次のように書かれている。「グローバル化する社会の中で、言語や文化が異なる人々と主体的に協働していくことができるよう、外国語で躊躇せず意見を述べ他者と交流していくために必要な力や、我が国の伝統文化に関する深い理解、他文化への理解等をどのように育んでいくべきか」（www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm）

ふり返ると、在外教育施設で行ってきた実践は、アクティブ・ラーニングとともに、これからの時代を担う子どもたちにとって必要な力を育てる、価値のある実践であったと感じる。

3年前に初めて降り立ったアメリカの地。何度聞き返しても聞き取れず、何度言っても伝わらない英語。何をすることも思い通りにならなかった日々も、今では、よい思い出である。うまくいかないこともたくさんあったが、それ以上に得た物がある。相手に伝えたいという強い気持ちを持ち、失敗など気にせず表現すれば相手に伝わる人が多いことを、子どもたちの学習でも、日々の実体験でも実感することができた3年間であった。

これからも、明日を担う子どもたちに、在外教育施設勤務を通して得たことを少しでも多く伝えていけるよう努力していきたい。